

# AR CA DIA

60  
SPRING 2014

Okazaki City Museum News

岡崎市美術博物館ニュース

[アルカディア]



OKAZAKI  
MINDSCAPE  
MUSEUM

岡崎市美術博物館

# 眼の極楽⑪ 江戸の花園

館長 榊原悟

## 四季の庭

南東(紫の上の春の町)は、山高く、春の花の木、数を尽くして植ゑ、池のさま、ゆほびかに面白くすぐれて、御前近き前栽、五葉・紅梅・桜・藤・山吹・岩躑躅などやうの、春のもてあそびを、わざとは植ゑて、秋の前栽をば、むらくはのかにまぜたり、

中宮の御町(秋好中宮の秋の町)をば、もとの山に、紅葉、色濃かるべき植木どもを植ゑ、泉の水とほく澄ましやり、水の音まさるべき岩をたてくはへ、滝落して、秋の野をはるかに作りたる、そのころにあひて、盛りに咲き乱れたり、嵯峨の大井のわたりの野山、むとくにけおされたる秋なり、

北の東(花散里の夏の町)は、涼しげなる泉ありて、夏の陰により、前近き前栽、呉竹、下風涼しかるべく、木高き森の様なる木ども、木深くおもしろく山里めきて、卯の花咲くべき垣根、ことさらにし渡して、昔思ゆる花橘、撫子、薔薇、くたに(竜胆)などやうの花くさぐさを植ゑて、春秋の水草、その中にうちまぜたり、ひんがし面は、分けて馬場の殿つくり、埒結びて、五月の御遊び所にて、水のほとりに菖蒲植ゑしげらせて、むかひに御殿して、世になき上馬どもをとくのへ立てさせ給へり、

西の町(明石の上の冬の町)は、北おもて築きわけて御蔵町なり、隔ての垣に唐竹植ゑて、松の木しげく、雪をもてあそばん便りによせたり、冬のはじめの朝霜むすぶべき菊のまがき、われは顔なる柞原、をさく名も知らぬ深山木どもの木深きなどを、移し植ゑたり、

## 『源氏物語』少女

六条院四季の庭に植えられた草木花草が、これである。割りふる季節に若干の違いはあるものの、現在のわたしたちにも、それぞれの季節を代表する草木である。む

## ESSAY

ろん王朝人の熱狂さに較べれば、花橘や撫子に対する現代人の気持ちは冷めていと云えるだろう(それにしてもあの「さつき待つ花橘の香をかげば昔の人の袖の香ぞする」はなんと云ういい歌だ)。だが両者の間にある、その温度差にこそ、それぞれの時代の眼の枠組の違いを読み解くことができる点については、すでに卯の花と菜の花の場合を例に述べたので、改めて思い出して欲しい。

ところでこの四季の庭、いまのところ、それを最初にまとめたかたちで述べたのは、実は『源氏物語』のまさしく掲出の件であった。長い引用もそれ故だ。むしろ四季の庭の原型として、さらに四方に四季を配した中国の陰陽五行思想に基づく庭があつたのだろう。それが平安時代、西方極楽浄土のイメージと結び付き、新たに紡ぎ出されたものこそ『源氏物語』が述べたような四季の庭であるという(ペティーナ・クライン「新発見の四季草花小禽図屏風について―中世末期狩野派の金屏風の一例の様式分析及びその図像についての注釈『国華』1044・1045・1047・1048号)。

確かに王朝貴族たちの心情に決定的影響を与えた源信(九四二―一〇一七)の『往生要集』が説く極楽とは、五妙境界の楽、すなわち五官の対象である色・声・香・味・触の五つが美しく淨らかに勝れたところだと云い、そこは、

光明周遍して日・月・燈燭を用ひず、冷暖調和して、春秋冬夏あることなし、自然の徳風は温冷調適し、衆生の身に触るるに皆快樂を得ること、譬へば比丘の、滅尽三昧を得るが如し

岩波文庫版『往生要集』大文第二欣求浄土

と、光に満ちあふれ、春夏秋冬・四季の別なく、寒からず暑からず、自然に吹く風でいつも穏やかで快適な温度を保っていた、とある。まさしく暑さ寒さも彼岸まで、と云うわけだが、ここでのミソは、その極楽に四季と云うより、その別がない点だろう。別がないのなら、すべてを完備させればよいのではないか―王朝貴族に光源氏がそう考え

たか否か、『源氏物語』自体は何も語っていないが、六条院に、草花が四季の推移と共に咲き匂う庭を造った着想のどこかに、『往生要集』の説くこの極楽のイメージと通じるところがあることは否定できまい。現に『源氏物語』は、六条院での暮らしを、

生ける仏の御国

と述べているのではないか。この世(此岸)の浄土であるというのだ。

興味深いのは、この四季の庭＝浄土のイメージを、わたしたちの先祖がさらに時代と共に豊かにふくらませた点である。中世から近世にかけて人びとが親しんだお伽草子の中においてである。そこでは、ある特別の場所を述べる際、ほぼ例外なく四季の庭を語ることを常とした。蓬萊山や竜宮城しかり、鬼の館しかり、そしてまた浄瑠璃姫の、あの矢矧の長者の館しかりである。それらが異界、異境である限り、この世ならぬ彼岸＝浄土と重ね合せて認識されたからなのだろう。しかし浄土の表象としての四季の庭が、これら異界にもあったとするのはごく自然な連想であるに違いない。

もちろん、その四季の庭が、六条院のそれと同じであるはずもない。六条院の四季の庭が、あくまで生ける仏の御国のそれとして、つまりは現実の庭として着想されていたのに対し、それらの庭では、その異界のこの世ならぬ異界性を、さらに増幅させたがための表象として、ある特性が与えられていた。その特性とは…、極楽と同じだ、と云えばもうお分かりだろう。そう、四季の別なく、つまりはその庭では、四季の草花がいつも同時に咲き匂う。そんなことあるはずもない？いや、そうであればこそ、そこは浄土であり、異界であった。

では、そこに咲く草花はどんなものであったのだろうか。ここではそんな異界を代表させて、酒伝童子の、鬼の棲む館の四季の庭を見ておこう。

やうやう宮殿に近づき、見ればそのあたりには四季の景気を学べり。おそろしき鬼が岩屋なれども、その気色は、さながら都にことならず。

まづ東面を見てあれば、春の気色とうち見えて、梅と桜の咲き乱れ、柳の糸の春風に、なびく霞のうちよりも、鶯の声澄みわたり、軒近く咲く木々の色、いづれの

## ESSAY

梢も花なれや。

南面を見てあれば、夏の気色とうち見えて、春を隔つる垣には、まづ卯の花や咲きぬらん。池の蓮は露かけて、水際涼しき小波に、水鳥あまた戯れつつ、繁みがちなる梢の空に鳴く蝉の声、あはれなり。夕立とほる時鳥、鳴きて夏とや知られけん。

西は秋かとうち見えて、四方の梢も紅葉して、籬のうちなる白菊や、露たちこむる野辺のすゑ、小萩か露を分け分けて、声ものすこき鹿の音に、秋とのみこそ知られけれ。

さて北を眺むれば、冬の気色とうち見えて、四方の梢も冬枯れの、朽葉に置ける初霜や、山々はただ白妙の、雪に埋るる谷の戸に、心細くも、炭竈の煙にしろき賤がわざ、冬を知らする気色かな。四季の体のおもしろさに、そぞろに時を移しけり。

鬼を退治せんと、恐ろしいその館に入ったことも忘れ、源頼光一行が、四季の庭の美しさに、つい見とれてしまう当り、これに寄せるわたしたちの先祖の思いの深さが投影されているのだろう。むしろ異界の庭でも咲き乱れるのは、この世の花である。しかしその種類は六条院の庭のそれよりはるかに多い。しかも鶯に時鳥、鹿の声も聞こえる。王朝人のみならず、わたしたちの先祖が四季を感じるための契機となった草花や鳥などは、ここに尽きると称してよいだろう。もとよりそれらすべて描くわけにはいかない。この問題の詞書を画面化するに当って狩野元信(四七六―一五五九)は、梅 松に藤 小菊に萩(葛)、そして雪積もる柳をもつてした。これらこそが、元信の時代、究極の四季の草花と言わんばかりである。それにしても冬の、雪が積もった樹木が、どうして柳なのか。ここでもわたしたちの季節感とズレがある。どうしてなのだろうか(続く)。



サントリー美術館本『酒伝童子絵巻』(狩野元信筆)より 梅、藤、秋草(葛、薄、萩、菊)、雪積もる柳で四季の草花を代表させた

前号でも少し触れたように、藤井は、放浪生活のなかで晩年には岡崎にも暮らし、その最期を迎えたのも岡崎市民病院でした。それこそ、熱心な支援者がいた時代には、藤井は郷土の大先生とされてきました。ところが、最近ではこうした状況も変化し、大正・昭和初期の東京での進取の活動が注目されるにつれ、美術史の世界において、「近代工芸の先駆者」として、富本憲吉などと並んでその評価が高まっています。したがって、「全貌展」と銘を打ちながらも、本展の作品の中心は、どうしても東京時代のものになってしまいます。そこで、敢えてここでは、岡崎市と藤井の関係に焦点を当てたお話をしたいと思います。

藤井が最初に岡崎を訪れたのは、戦前のことです。大正二四年、東京で活動する愛知県出身の作家たちが結成した「愛知社」に参加したのですが、その会の中心画家加藤静児の支援者であった千賀千太郎(名誉市民、衆議院議員、商工會議所会頭)が、岡崎で「愛知社」展を開催した折りに、藤井も来岡したのです。

しかし、何と言っても重要なのは、伝馬通りにあった料亭「中むら」の経営者中村くにとの交友でしょう。「閑翁閑談 藤井翁を偲ぶ」(『東海新聞』昭和三九

年)には、「翁も翁の姉しのさんも中村さんをわが娘のように愛していられた」とありますが、彼女と藤井の出会いはいささかに旧く大正八年頃にさかのぼるといいます。まだ、「市丸」の名で芸妓をつとめていた時代です(ちなみに「正調五万石」を唄ったのが中村くにです)。その後、昭和二五年に、彼女は岡崎の財界人の出資を得て、料亭「中むら」を設立したのですが、ここは、ちよつとした文化サロンのような存在だったでしょう。藤井も度々訪れ、例えば、昭和三四年、当時の桑原県知事から、藤井がニューヨーク高島屋で開かれる「日本貿易博覧会」へ出品する県下特産工芸品の選択と指導の任を受けた際には、打合せ会議がここ、中むらで開かれ、瀬戸作陶会の亀井清市や小原の漆研究家安藤繁和なども集まりました。

藤井は、昭和三年からしばらく大樹寺の近藤重吉氏の離れに仮寓し、三七年には終の棲家として、戸崎町に移り住みました。松尾資信愛知県総務部長を中心に「藤井達吉翁帰郷歓迎発起人会」が設立され、吉良町宮崎海岸にあった宮崎保養所を払い下げしてもらい、日清紡工場裏手の土地へ移築、帰郷を積極的に促したのです。当然ながら、中村くにも中

## EXHIBITION

心となって働き、藤井も「地元の人熱心さに負けた」としてこれを受け入れたのでした(面白いのは、こらえ性のない藤井の性格で、「工場噪音が心を乱す」として八ヶ月で湯河原に移つてしまいます。しかし昭和三九年には、「岡崎に骨を埋めたい」として戸崎町に戻り、七月に死去。葬儀は、昌光律寺で行われました)。藤井はこの恩義にと、岡崎市に継色紙を八〇点ほど寄贈したのですが、その仲介を果たしたのも、まとまった翁のコレクションの必要を感じた中村くにのようです。彼女自身も、昭和四七年に美術品を二〇点ほど、翌四八年には工芸品を九〇点ほど岡崎市に寄贈し、昭和五年に亡くなると、こ子息から一〇〇点を越える作品が寄贈されました。

今では東京時代の活動が注目されていますが、改めて藤井の岡崎での活動を整理し、詳細を調べてみる必要を感じています。



四季花草図 あざみ(秋) 1926年 岡崎市美術館蔵

## 藤井達吉の全貌 野に咲く工芸・宙を見る絵画

千葉真智子

会期：平成26年4月5日(土)～6月1日(日)

収蔵品展

# 古文書 みりよく発見!

湯谷翔悟



A



B

## 【問1】

上にならべた二つの古文書。これを比べて、異なる点を挙げなさい。

…あつ、読むのやめなさいでください(汗)! 試験をしたい訳ではございません。ただいつもより少しだけ長く、古文書を眺める時間をもっていたら良かったんです。

アルカディアを見ていただけのくらいなので、きっと歴史にも興味があることと思えます(「そんなことはない、私は美術が好きなんだ!」とおっしゃらず、もう少しお付き合いください)。そこで次の問です。

## 【問2】

あなたは歴史の展覧会で古文書を何秒眺めていますか。

「〇秒?二分??近ごろ歴史好きの女性のことを「歴女」と呼ぶようですが、そんな方でも「信長サマの古文書の前なら何時間でも居られるわ♡」ということはないかと思えます。おそらく【問2】に対して、多くの方の答えは一分未満ではないでしょうか?説明書きを読む時間の方が長い、なんてことはありませんか?実物をほとんど見ずに解説を読むなら、実はホンモノの古文書を表示する必要ってそんなにないん

## EXHIBITION

じやないでしょうか。資料の保存のためならその方が絶対に良い。

今回の展覧会はそんな「展覧会で古文書を表示する意味ってなんだろう?」という疑問から出発しました。せつかく気持ちよく眠っていた古文書を起こして展示されてもらうんだから、どうせなら皆さんにもつとよく見てもらいたい!そう思うのです。

そこでようやく【問1】に戻ります。答えが「どつちも読めないし一緒にみる」だった方もいらつしやるかと思えます。それで全然間違いではありません。けど実は、読めなくてもたくさんの「情報」が詰まっているんです!例として

【問1】の解答と解説を一つだけ挙げてみます。

答: BはAに比べて紙が白っぽい。

Aは「大高檀紙」という紙で、「高さの大きな(縦が長い)檀紙(紙の種類)」のことです(大きさは分かりませんが)。不純物を丁寧に取り除くために白色になっています。この大高檀紙は豊臣秀吉・秀次や徳川将軍が使用しました。つまりAは色と大きさから秀吉や徳川将軍などが出した文書ということがわかります。

だ書き足りないのに: :

もう一つだけ! Aには左下のほうにサインみたいな記号が記されていますが、これを「花押」といいます。対してBには左下に朱い印鑑が捺されています。二つともその人が出した文書であることの証明なのですが、一般に花押を記した文書(判物)と言います)より印を捺した文書(朱印状)の方がいばつた表現とされています。実はこの二つの古文書、両方とも家康が大樹寺に出した法令なんです。それなのに大樹寺に対しての態度が異なっているんです。そこで最後の問です。

## 【問3】

同じ宛先なのに、家康の礼の示し方が異なるのはなぜか。AとBでより古い古文書はどちらか。

いよいよ書くスペースがなくなってきたので答えは展覧会で! 普段解説書きばかり見てるなつて方にこそ発見がたくさんある、そんな展覧会にしよう頑張っています。私自身初めての展示なので、どうなることやら: : その辺も乞うご期待(?)ということ。

会期:平成26年6月14日(土)~7月27日(日)

収蔵品紹介 村山槐多《風景（農家）》 村松和明

荒涼とした空間に立つ家々。中央には黒い煙突が薄暗い空を突き刺すように伸びている。それを囲うように電柱が立ち並び、斜めの鉄線と水平の電線とが交差することで律動を生みだしている。右下には、「村山槐多一九二六年一月三日」との記名がある。十九歳の頃の作だが、この三年後に夭折していることから晩年の作といえる。

一九二六年当時の彼は、前年の十一月に、東京に越してきた父との争いの激化や、極度の貧窮など、心身ともに荒んだ状況にあった。その混沌とした彼の精神のあり様がこの風景に表れているようだ。しかし、制作に対する意欲や探究心は充実していたことから、彼の描画の技術と絵画の知識、蓄積された思考などが画面に率直に反映された最盛期のデッサンといえる。

当館がすでに所蔵している人物デッサン《無題》には、右上に「一九二六年一月二日」とある。ということは、この風景画の前日に描いた作品であることがわかる。支持体も同じ「Ingres」のエンボスが入ったフランス製のデッサン紙である。《無題》は、内

面に潜む恐ろしく変容してしまった自己の精神の有様を、象徴主義に倣って描き出した自画像であろうことは本紙四十四号に書いたとおりだが、翌日には、その内面を外部の風景に向けてこのような凄みのある風景画を描いたことになる。

本作は、村山家に大切に伝えられてきたもので、平成二三年度に当館で開催した「村山槐多の全貌」展に出品された折、当館に寄託したいとお申し出をいただいた。近年、岡崎生まれと分かった槐多の作品が、このように縁を得て一点ずつ帰郷してくることは喜ばしいことである。



COLUMN & TOPIC

収蔵品紹介 日吉山王社神像 浦野加穂子

山王とは比叡山の東麓に鎮座する日吉大社の神々の尊称です。山王は天台宗の祖である最澄から深い崇敬を受け、天台宗の護法神、比叡山の地主神として信仰され、西本宮（大宮）の大己貴命と東本宮（二宮）の大山咋命を主神とします。また仏

が人々を救うために神の姿で現れたとする本地垂迹説により本地仏が定められています。天台宗の寺院には鎮守として山王社が建てられ、天台宗の興隆とともに山王信仰は全国に広まってきました。

滝町の日吉山王社は、滝山寺中興の祖である仏泉永救が保安年間（一一二〇～一二四）この地に來住した際、滝山寺の鎮守として山王権現を勧請したことに始まります。日吉山王社には木造の七軀の神像が伝わっています。平成二五年一月の文化財調査により、七軀の尊名のほか、四軀が鎌倉時代、三軀は台座底面の墨書銘より江戸時代の延宝七年（二六七九）の作と判明しました。鎌倉時代の四軀は日吉大社の神像の正統な姿に基づくもので、鎌倉時代の山王神像の基準作例となる重要な神像として注目されています。

倉時代の像は彩色の剥落が著しいため、昨年奈良教育大学の協力によりフノリなどを用いて剥落止めの処置が行われました。資料の保護と防犯の面から、今年度寄託を受け、当館の収蔵庫で保存しています。

写真は僧形神坐像（大宮）です。「大宮」は日吉大社の主神であり、飛鳥の三輪神を勧請したもので、本地仏は釈迦如来です。像高は二二・八cmで、主神のため他の像よりも大きく、本来は右手に払子や団扇などを持っていたとみられます。本像は十四世紀初頭成立の「瀧山寺縁起」にある僧院耀（建長五年／一二五三没）が造立した神像にあたる可能性が指摘されています。



日吉山王社神像より「僧形神坐像（大宮）」  
滝町・日吉山王社蔵

## 平成二五年度展覧会総括

堀江登志実

平成二五年度の展覧会が終わった。一年をふりかえってみよう。ポール・デルヴォー展は、デルヴォー作品の最初期から晩年までを展示するとともに電車・建築などモチーフの源泉をたどるものであった。その詩的な絵画は神秘的な幻想世界を十分に堪能させてくれた。ゆかりのまち三〇周年記念の佐久市近代美術館所蔵名品展では平山郁夫の作家人生の原点となった《仏教伝来》を借用させていただいた。あらためて

佐久市近代美術館コレクションの豊富な量、充実した内容に感心した次第である。あいちトリエンナーレ並行企画ユーモアと飛躍展には七組八人の作家の作品を展示、作家トーク、ワークショップなど様々なイベントを展開。個性的な作家の人たちとの会話、交流の思い出が印象強く残っている。やってよかった。祈・PRAY—古今東西祈りの風景では、祈りに使われたものや祈る姿の造形などを展示。市内寺社の寄託資料が充実している当館の腕の見せ所である。民具などを展示する暮らしのうつりかわり展は小学校三年生の学習支援を想定して企画。市

内三年生の半分以上が見学来館。

学校教育との連携は好評を博し定例行事化しつつあり、参加学校・人数も増えている。うれしい。入場者に限つていえば、ポール・デルヴォー展九、九二四人、佐久市近代美術館所蔵名品展五、八三三人、ユーモアと飛躍展四、八〇一人、祈・PRAY展三、〇八四人、暮らしのうつりかわり展六、四五六人。二五年度展覧会の総入場者数は、三〇、〇九八人で前年を二万人ほど下回った。展示評価は入場者数によって決まるものではない。来館者の声を聴くべきであるが、当館まで足を運んでいただけなければそれも叶わない。魅力ある展示内容に来年度もしたい。平成二六年度の展覧会は藤井達吉の全貌展（四月五日～六月一日）展、法隆寺展（八月九日～九月二日）、浮世絵の美展（一〇月四日～十一月二四日）の三本の企画展を中心に、テーマを設定した収蔵品展三本の合計六本を予定している。来館いただけるよう情報発信を密にするとともに、学芸員の熱い思いを伝えてゆきたい。ご期待ください。

## COLUMN & TOPIC

### 『大樹寺文書 上』を刊行します

湯谷翔悟

当館では「岡崎市史料叢書」として過去「中根家文書」上・下、「長嶋家御用日記」を刊行してきましたが、今回その四冊目「大樹寺文書上」を刊行することとなりました。

大樹寺は松平家四代（安城松平初代）親忠が、勢眷愚底を開山に創建した浄土宗の寺院です。松平氏の勢力伸長とともに大樹寺も寺格を上昇し、江戸時代には將軍先祖の菩提寺として尊崇を集めます。徳川家康が遺言で、自分の死後位牌を大樹寺に立てるよう命じたことでも有名でしょう。

この度刊行する『大樹寺文書 上』では、大樹寺に伝わる文書のうち、中近世文書と近世の記録類を収録しています。中近世文書はこれまで『岡崎市史』や『愛知県史』などにも採録されてきましたが、今回は編年で配列し、大樹寺の歴史的展開を迫る形にしました。近世の記録類はそのほとんどが初の全文翻刻となります。そのうち「徳川歴代將軍位牌記録」では、八代吉宗・二代家治など歴代將軍の位牌が、大樹寺に納められる時の経過や儀式の様子などが伺えます。特に吉宗の

位牌を納めるための大樹寺から幕府への働きかけの記録は、位牌所としての大樹寺のあり方を考える上で大変興味深い史料です。「安政御再建日鑑」は、幕末の大樹寺の焼失から再建までの記録です。今に伝わる威容がいかにして再建されることになったのか、その経緯を辿る好個の史料といえるでしょう。他にも近世初頭の文書記録「旧記之写」のほか、近世中期の大樹寺の全体像や歴代住持の来歴が分かる「大樹寺記録」と「御当山世代記」を収録しています。「大樹寺略史」と「大樹寺文書概要」からなる解説は、愛知教育大学名誉教授新行紀一先生にご執筆いただきました。

発売は五月の予定です。中近世における大樹寺の展開と、活動の具体相を知ることができると一冊となっています。戦国期の三河地域・松平氏や、江戸幕府の寺社政策を考える上で欠かすことのできない史料を採録しました。広く皆さまにご味読いただけることを願っています。

# INFORMATION

## 藤井達吉の全貌

2014年4月5日(土)～6月1日(日)

### ■講演会

4月20日【日】「藤井達吉の工芸と特異性」

講師：瀬尾典昭(渋谷区立松濤美術館学芸員)

5月18日【日】「生活と自然の再発見—藤井達吉と大正期の工芸」

講師：土田真紀(美術史家・帝塚山大学文学部非常勤講師)

### ■ワークショップ

「いろいろとりにチクチクぬうよ テクテクたびするワークショップ」

\*5月3日【土・祝】午後1時～4時30分

講師：スサイタカコ(美術作家)

お気に入りだったのに破れたり汚れたりしてしまった服やカバン。刺繍やアップリケ、ニンギョウなどで愉快に甦えさせましょう。身につけておでかけ、想い出と一緒に日常を旅しましょう。

会場：当館2階、定員：20名(応募多数の場合は抽選となります。)

対象：年齢制限なし(ただし低学年以下の方は保護者の同伴が必要です)

申込方法：往復ハガキに代表者氏名・年齢・郵便番号・住所・電話番号・参加者全員の氏名・年齢を明記の上、4月21日【月】までに岡崎市美術館「ワークショップ係」までお申し込みください(必着)。★当館ホームページからもお申し込みいただけます。

## 古文書 みりよく発見!

2014年6月14日(土)～7月27日(日)

■昨年開催した「ユーモアと飛躍 そこにふれる」展(2013年8月17日～10月20日)の展覧会図録収録論文千葉真智子(当館学芸員)著「ユーモア—知りえぬ世界についての気づき」が、美術館連絡協議会カタログ論文賞にて優秀論文賞を受賞しました。

### 「女つ気なし」

昨年末からしばらく映画熱が高まって、見逃して悔しく思っていた新鋭グザヴィエ・ドラン監督の「わたしはロランス」を東京のミニシアターで見て、少し前には初期作品の「マイ・マザー」も観たりした。性差の問題と、それによって浮かび上がる親子や恋人、家族間の、深く、そして不安定な関係をえぐるように描き出す作風は、映像美と音楽の効果も相まって圧巻である。登場人物は、声を荒げ、剥き出しの感情に、「こちらが苦しくなるくらいである」。

一方、見終わるなり「も二もなく「好き!」と思ってしまったのが、ギョーム・ブラック監督の中編「女つ気なし」である。主人公は、今は廃れたフランス北部の保養地オルトに暮らすシルヴァン。ヴァカンスに訪れた澆刺とした母と控え目な娘との数日を描いた本作には、派手さは皆無で、場面は小気味よく展開する。シルヴァンには、故郷の地味な生活に鬱屈した様子はないが、部屋に流れる音楽や服装からは、外の世界へのわずかな夢想も窺われ、ひと時の母娘との交友を楽しむ姿からは、一抹の切なさも感じられる。頭も禿げかけて、お世辞にもかっこいいとはいえないシルヴァンとヴァンサン・マケニューが、しかし妙に可愛く、胸を掴まれてしまった。(千)

## おしゃべり、あれこれ。

### 名演奏の想い出

名指揮者クラウディオ・アバドが亡くなった。享年八〇歳。クラシックファンのみならずともその名を知っていた帝王カラヤンの跡を受け継ぎ、世界屈指のオーケストラであるベルリンフィルを任されたことで知られています。

四〇年前、奮発して購入したウィーンフィルのコンサートの指揮が彼で、四〇歳直前での初来日の時でした。当日のプログラムはモーツァルトとベートーヴェンの交響曲。ウィーンフィルの豊潤な美音に酔う中、オーケストラの自主性に任せながらも要所を抑えていく若々しい彼の姿に魅入ったものでした。高校卒業直後の出会いでした。その時から丹精での確な表現に満ちた彼の演奏をCDなどで集め続けてきています。

そんな彼が大きく変わったのが二〇〇〇年の癌、再起不能といわれていたのが手術を経て見事に復活。でもその姿は、頬はこけ、動きはたどたどしく、どこか痛ましいまでの悲壮感がただよっていたのです。しかし指揮棒をもつ手は流麗に曲への思いをさし示し、オーケストラを自在に操り、若々しいモーツァルトや、すべての情念を振り払うようなマーラーの名演奏が生み出されていたのです。人生の最後を意識し振り絞った音楽だったのでしょうか。そんな気がしてなりません。(完)

編集後記 | 新しい年度がスタートしました。本年度は「藤井達吉の全貌」展にはじまり、夏には国宝「観音菩薩立像(夢違観音)」もお目見えする「法隆寺展—聖徳太子と平和への祈り」展が控えています。『アルカディア』では、こうした展覧会をご紹介するとともに、当館の活動以外の情報も盛り込んで、より楽しんでいただける誌面作りを心掛けたいと思います。(千葉)

表紙図版：藤井達吉(大島風物図屏風(右隻)) 1916年 碧南商工会議所蔵



開館時間 午前10時～午後5時

※最終の入場は閉館時間の30分前まで

休館日 月曜日(祝日に該当する場合は、その翌日以降の休日でない日)

年末年始 ※展示替えのため臨時休館する事があります。

[岡崎市美術館ニュース/アルカディア] 第60号 2014年4月発行

編集・発行 岡崎市美術館

〒444-0002 愛知県岡崎市高隆寺町峠1 岡崎中央総合公園内

TEL.0564-28-5000 (代表)

岡崎市美術館

<http://www.city.okazaki.aichi.jp/museum/bihaku/top.html>

ARCADIA